

# 長岡新田闕保遺跡 黒尾

長野県上伊那郡箕輪町  
緊急発掘調査報告書

1986

箕輪町教育委員会

# 長岡新田関係遺跡

## 黒 尾

1986

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 橋口彦雄

上伊那広域水道構想の検討が新規ダム建設計画にあわせて、昭和47年度より行われてきた。この新規ダム計画は、長岡新田地域の沢川水系を箕輪ダムとして建設することにきめ、昭和55年に上伊那広域水道用水企業団を設置した。

長岡新田関係遺跡の発掘調査は、この箕輪ダムとして建設に伴うための緊急発掘調査である。昭和59年度において、末広A・落合A・黒尾の三地籍を確認調査、60年度において、末広A・落合Aの二遺跡の本調査を完了した。

黒尾遺跡は長岡新田日向の黒尾地籍にあり、ダム建設のため不要な土を捨てる、いわゆる土捨場の予定地であり、東南に傾斜したわずかな広さの地域である。

発掘調査の結果の細部は草を追って明らかにするが、長岡新田の全戸が、他地区におのおの移住してしまい無人となっている現在、本調査によって、縄文時代早期（約7000年前）から人々の生活の場となっていたことがわかった。多数出土した集石は縄文中期の人々の、祭祀の場であつただろうと推察される。また検出された一ヶ所の住居址（平安時代後期、11世紀）は前年に調査した二遺跡の時代と全く同じで、新田の谷に所を異にして平安時代後期に住居があったと推定される。今後、一の沢・落合B・羽場垣外の各遺跡の調査が予定されている。

本報告書作成に当たり、長岡新田まで足をのばして発掘作業をされた調査者のみなさんや、出土の整理に当たられた方、本報告書作成に当たられた関係各位に厚く御礼を申しあげます。

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町長岡新田に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は伊那建設事務所の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は昭和61年5月16日～6月3日まで実施した。

調査終了後に整理作業を実施し、引き続き報告書作成を行なった。

作業の分担は次の通りである。

土器の実測・トレース 竹入洋子、

土器の拓本・断面実測・トレース、 山内志賀子

遺構実測図の整理、トレース・ 竹入洋子

石器実測・トレース 竹入洋子

拓影、図版作成 山内志賀子、柴登巳夫

写真図版作成 山内志賀子、 柴登巳夫

4. 本書に掲載した遺構及び、遺物写真は柴登巳夫、石川寛が撮影したものを使用した。
5. 本書の執筆は整理担当者が行い、文末にそれぞれの文責を記した。
6. 本書の編集は柴登巳夫が行った。
7. 土器の考察は飯塚政美氏にアドバイスをいただいた。
8. 本書資料は箕輪町郷土博物館に保管されている。

# 本文目次

題 字	教育長 桶口彦雄
序	教育長 桶口彦雄
例 言	
本分目次	
挿図目次	
図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の立地	1
第1節 位 置	1
第2節 自然環境	2
第3節 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	4
第1節 調査の経過	4
第2節 調査の概要	4
第3節 発掘調査日誌	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第1節 遺 構	8
1. 集 石	10
2. 住居址	19
第2節 遺 物	20
1. 土 器	20
2. 石 器	25
第Ⅳ章 ま と め	28

## 挿 図 目 次

第1図	位置図	1
第2図	遺跡分布図	3
第3図	地形図	8
第4図	遺構全測図	9
第5図	集石1実測図	10
第6図	集石2実測図	11
第7図	集石3実測図	12
第8図	集石4実測図	13
第9図	集石5実測図	14
第10図	集石6実測図	14
第11図	集石7実測図	14
第12図	集石8実測図	15
第13図	集石9実測図	16
第14図	集石10実測図	17
第15図	集石11実測図	18
第16図	第1号住居址及びカマド実測図	19
第17図	出土土器実測図	20
第18図	出土土器陶器実測図	21
第19図	出土土器拓影(1)	22
第20図	出土土器拓影(2)	23
第21図	石器実測図	25
第22図	石皿実測図	26

# 図版目次

- 図版 I 遺跡全景
- 図版 II グリッド状況と住居址
- 図版 III カマド状況と土塙
- 図版 IV 集石 1, 2
- 図版 V 集石 3, 4
- 図版 VI 集石 5, 6
- 図版 VII 集石 7, 8, 9
- 図版 VIII 集石 10, 11
- 図版 IX 出土石器, 土器
- 図版 X 遺物出土状況
- 図版 X I 調査状況 I
- 図版 X II 調査状況 II
- 図版 X III 調査参加者

# 第1章 調査の立地

## 第1節 位 置

黒尾遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2210-1番地に位置している。長岡地区と南小河内区の間に流れ出す沢川は、長岡新田の谷を形成し、長岡から約3kmほど上がった地点で川は二つに別かれている。ここが落合である。左側に入ると日向地区で、落合から約1.5kmほど上がった所が黒尾地区になる。沢川に流れ込む小さな谷川に添ってわずかに開けた場所である。周辺には数戸の家が残っていたが、ダム建設に伴い現在では全く見られない。この地点から約400mほど上ると末広地区になる。標高は800m前後を示し天竜川面との比高200m余を計る。



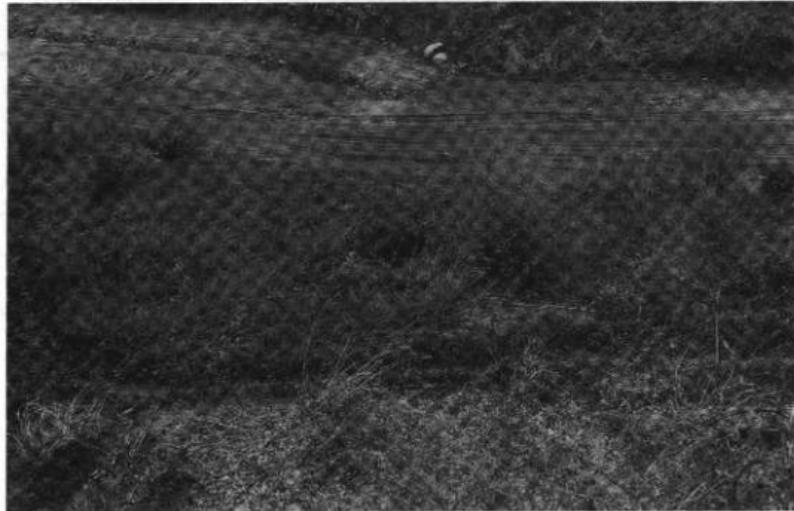
第1図 位 置 図

## 第2節 自然環境

伊那谷北部に位置する箕輪町は、南流する天竜川によって大きく二分されて呼ばれている。すなわち、天竜川右岸は竜西、左岸は竜東地区と呼ばれているのである。竜西地区は山麓まで数kmの平地を有するのに比べ、竜東地区は1km前後と狭く、扇状地と小台地が連続している。その中において沢川は最も流路が長く約10kmを計る。沢川によって形成された扇状地上に長岡区が位置している。沢川は天竜川合流地点より約3km上流で二つに分かれ、左手方面は日向地区と呼ばれて、有賀峠を越えて諏訪に通じている。右手方面は日影地区と呼ばれ松尾峠を越えて高遠に通じている。

一帯は石灰岩地帯で明治時代まで日影地区において石灰岩を掘り出してその場で焼き、長岡苦土として各方面に売り出した。熊倉沢地籍には鍊乳洞（町指定天然記念物）が二ヶ所発見されている。過去においてこの谷では、水晶・マンガンなどの鉱物の採集も行われた。

黒尾遺跡は左手に入った日向地区にあり、川に流れ込む小河川に添って位置している。東南に傾斜したわずかなテラスを利用している。前年発掘調査を実施した末広地区よりわずか下流で、遺跡地の標高は800mで、天竜川面との比高は約200mである。



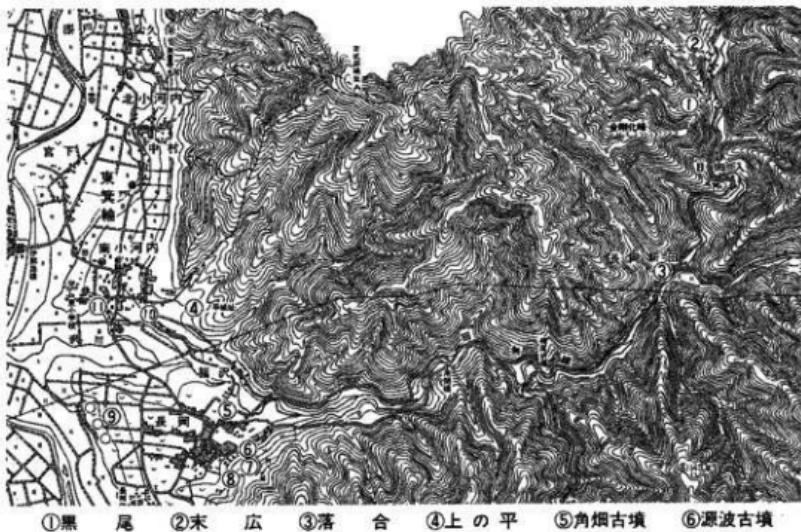
遺跡の近影

### 第3節 歴史的環境

箕輪町内には多数の遺跡が確認されているが、特に天童川東岸段丘上はその密度が最も高い地域である。長岡の台地上には多くの古墳が存在し古代からの繁栄を物語っている。一説には29基が確認されたという言い伝えもあるが、現在はその三分の一程度しか確認することができない。現状では段丘上突端に位置する羽場の森古墳が最も形状の整ったものである。

沢川周辺の遺跡中その代表的なものとして上の平遺跡がある。出土している遺物の時代的古さの点、また量的な面から見ても他の追随を許さぬところである。遺跡地は城跡としても県史跡に指定され、南信における最も古い城跡の一つとして、研究史に輝いている。ここから出土している柳葉形尖頭器は先土器時代の遺物として注目され、今後の調査に大きな期待がもたれている。

箕輪ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において、今までに発見された遺構・遺物は長岡新田の歴史を一気に数千年のかなたに引き上げた。末広・落合の遺跡はそれを代表するものである。縄文時代早期の押型文土器を始め、貝殻条痕文土器など、比較的古い時代の遺物が多く見られる。また、平安時代（11世紀）には集落を形成して生活している。黒尾遺跡もこの両遺跡同様、長岡新田の谷に入った人々の生活の跡を記す貴重な遺跡である。



第2図 遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査の経過

箕輪ダム建設事業に伴い埋蔵文化財調査の必要を生じ、昭和59年夏、遺跡の存在を確認するための確認調査が実施された。末広・落合・黒尾の三地籍である。この三地籍共に遺構及び遺物が確認されたため、昭和60年度において末広・落合の二地区の発掘調査を実施した。本年度は残りの黒尾地籍の発掘調査となったのである。

黒尾地籍はダム建設に伴う残土の捨て場所に計画された場所である。発掘調査は5月16日～6月3日に至る間、実施されたのである。調査を進めている最中においても周囲から埋める作業が続けられ、工事と平行した調査は、ダンプカーの騒音と土ぼこりの中で実施した。

その結果、绳文時代前期から中期にかけての遺構・遺物そして平安時代の住居址などが確認された。以下その概要を示した。

### 第2節 調査の概要

- ・遺跡名 黒尾遺跡
- ・所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪長岡新田
- ・発掘期間 昭和61年5月16日～6月3日
- ・調査委託者 伊那建設事務所長 須沢沖夫
- ・調査受託者 箕輪町教育委員会

調査団の構成は下記の通りである。

#### 調査団

- |     |      |             |
|-----|------|-------------|
| 団長  | 樋口彦雄 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| 担当者 | 柴登巳夫 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| 調査員 | 石川 寛 | "           |
| 調査員 | 竹入洋子 |             |

作業協力者

山内志賀子 唐沢清人 清水節治 松田幸雄 藤森秀雄 野沢良久 野沢徳章  
小林信義 山岸 工 井上武雄 小松敬一郎 根橋とし子 赤沼悦子

参 与

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育委員長  
桑沢 良平 箕輪町教育委員会教育委員  
那須 与一 "  
小島 迪彦 "  
荻原 貞利 文化財保護審議会委員長  
唐沢平八郎 " 副委員長  
矢沢 香治 文化財保護審議会委員  
小林正之進 "  
小林 健男 "  
山口 登春 "  
有賀 英幸 "  
原 久美 "  
市川 桂三 "  
向山 章 "

調査に関する事務局の構成組織は、下記の通りである。

樋口 彦雄 教育委員会教育長  
北川 文雄 " 社会教育課長  
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員  
石川 寛 "

### 第3節 発掘調査日誌

。5月16日 (金)

本日より調査を開始する。まず、器材搬入及びテントの設営を行う。調査地周辺は残土の運搬が始まっており、調査予定地の近くまで埋め土がせまっている。



テントは調査地より一段高い位置に設定。

。5月19日 (月)

発掘調査範囲内の草刈と、雑木等の切り取り作業を実施。

続いてグリッドの設定作業に入る。

南北に10列、東西に5列のグリッドを設定する。終了後直ちにグリッド掘りにかかる。



。5月21日 (水)

グリッド掘りを進める。表土は花崗岩の風化した黒色土が約1m程度埋積している。そのため表土の排土に苦労する。

縄文前期の土器片が石の間から少量検出される。



。5月22日 (木)

I-11グリッドに集石あり、J-8グリッド内に曾利II式土器片集中出土。

。5月23日 (金)

K-8グリッド内から圓石出土。J-11、K-11、L-7、J-7のグリッド掘り。



。5月25日 (日)

J-11グリッド内より縄文前期の土器出土。J-11内の集石2の精査、I-8グリッド掘り。

。5月26日 (月)

J-5、K-5グリッド掘り、I-10~I-9にかけて集石検出、集石2の写真撮影、実測。

。5月27日（火）

集石3の実測、J-6グリッドを中心にして土器出土。集石検出、グリッド調査を進める段階で、集石が検出される。この状況だと、調査区のほぼ全面に石が配されているのではないかと推定される。配石もところにより集中している部分が見られ、人為的配石の様子が強いと考える。



。5月28日（水）

教育長、課長視察・調査区北寄りにカマドを伴った平安時代の住居址発見、土師器、灰釉陶器片出土・集石2精査、集石3、4平板実測、写真撮影。



。5月29日（木）

天候雨により午前中のみ作業。

集石2、3、4、を半カットして、石の下の遺構状況を調査、K-7、8グリッド排土。



。5月30日（金）

雨により午後集石の実測のみ実施、集石6集石7を行う。

。5月31日（土）

L-5、L-6グリッドの堀り下げ、I-4、H-4、5グリッド掘り下げ、集石の実測。



。6月1日（日）

集石9、10精査、第1号住居址清掃、集石平板実測、第1号住居址写真撮影

。6月2日（月）

集石9、10、11平板測量、第1号住居址カマド測量、断面測量。

。6月3日（火）

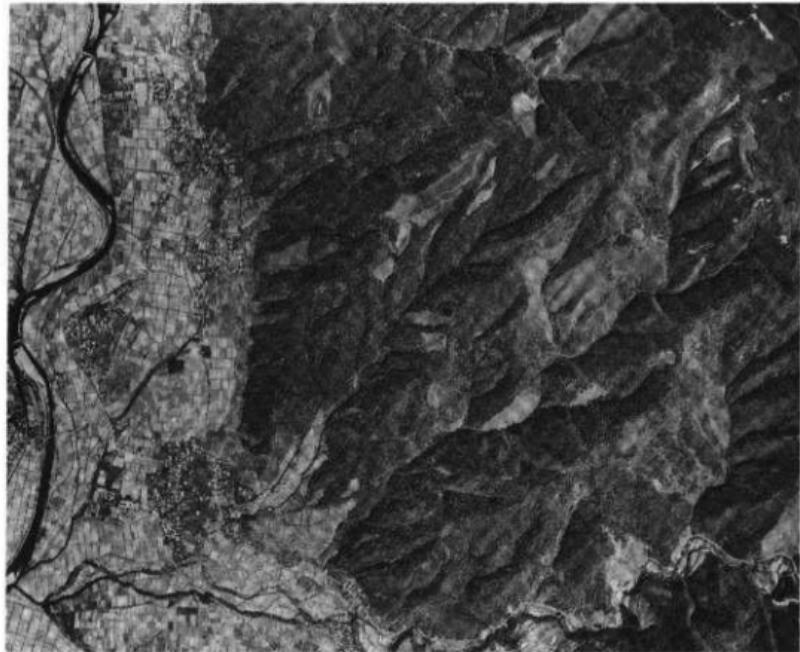
全体測量、片付、テントの撤去を行い、本日で調査を終了とする。

## 第Ⅲ章 遺構と遺跡

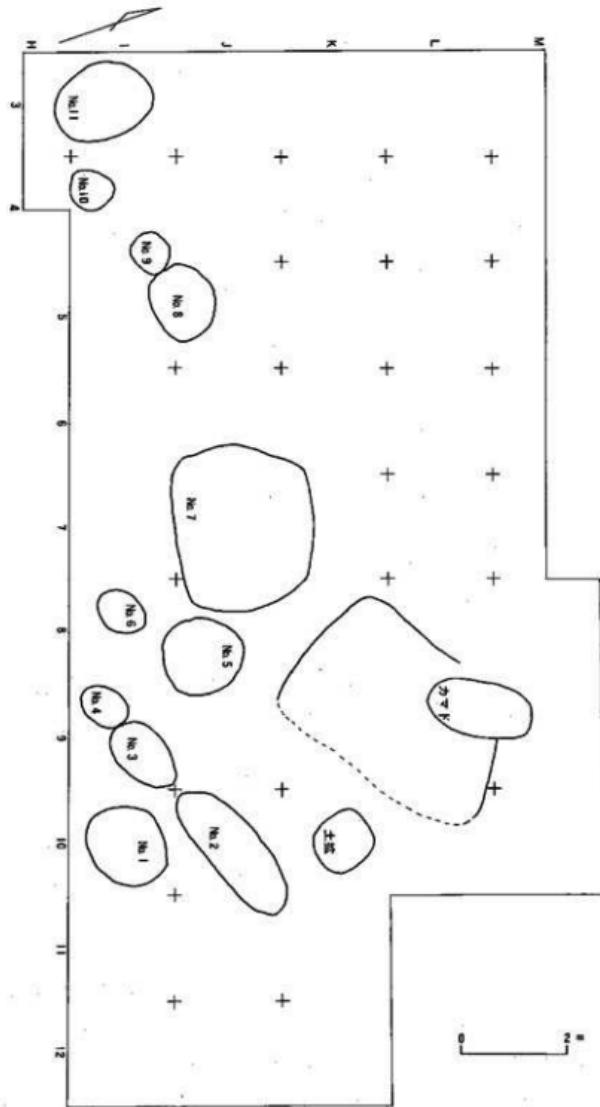
### 第1節 遺 構

本発掘調査における遺構の主たるものは、縄文時代中期（曾利II式）を中心とした集石である。これについては各集石ごとに若干の説明を加えてある。遺構のほぼ全面に集石が見られ、それも、それぞれ各単位ごとにまとまりを示している。一時期に全部の石を集めたという状況では無く、ある期間を通して集石を増していったようにも考えられる。

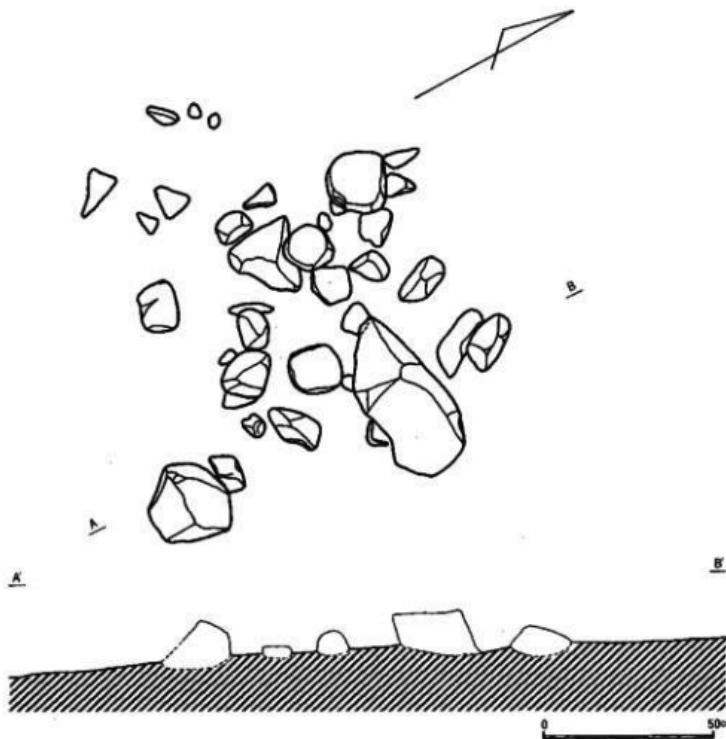
他の遺構としては平安時代後期の住居址が一ヶ所確認されている。背後に山がせまり東南に面したゆるやかなテラスを利用して住居地としている。黒色土中に掘り込んでいたため住居址のプランは一部分を除いて不明であった。以下各遺構ごとに記した。



第3図 遺跡周辺地形図（航空写真）



第4図 造構全測図

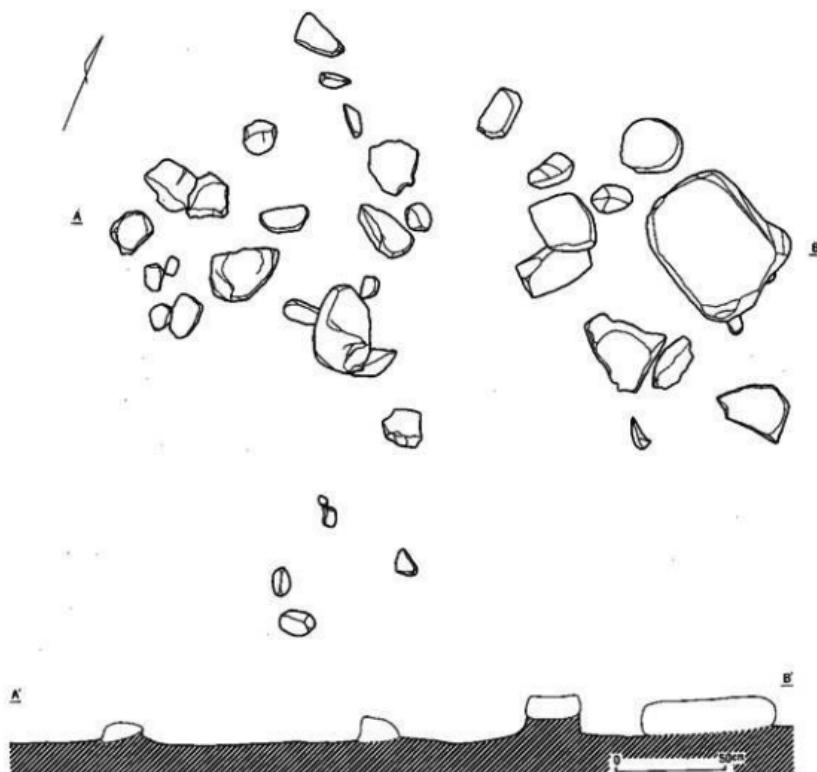


第5図 集石Ⅰ実測図

## 1集 石

### 集石 1

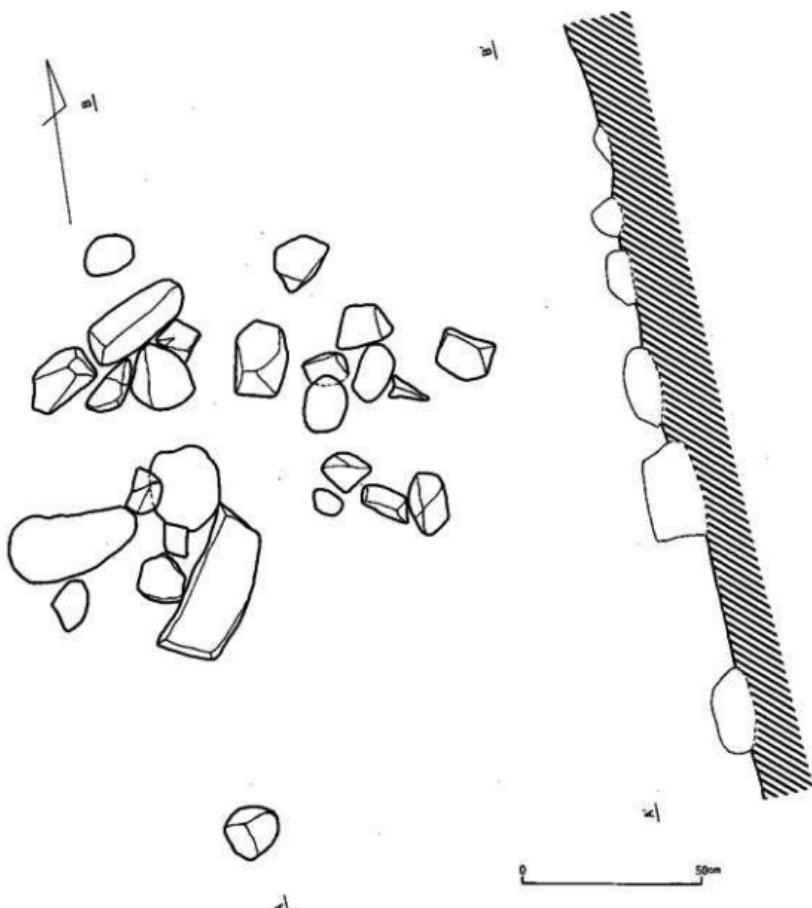
第4図は集石の位置を示したものである。ほぼ東西に並ぶ状況で配置されている。集石7を除いて、直径1~2m内外の円形範囲内に入っている。いずれも拳大から頭大の大きさの石を配置している。集石Ⅰは調査区東南の角に位置している。I-10グリッド内に入っている。約40個よりなる集石は角礫が多く、一部の石は割れているものも見られる。集石はほぼ同一面に配置してあり、集石の下には特別な遺構は見られなかった。石質は安山岩及び花崗岩が主体である。この集石の周辺からは前期の土器が多く出土している。



第6図 集石2実測図

### 集石2

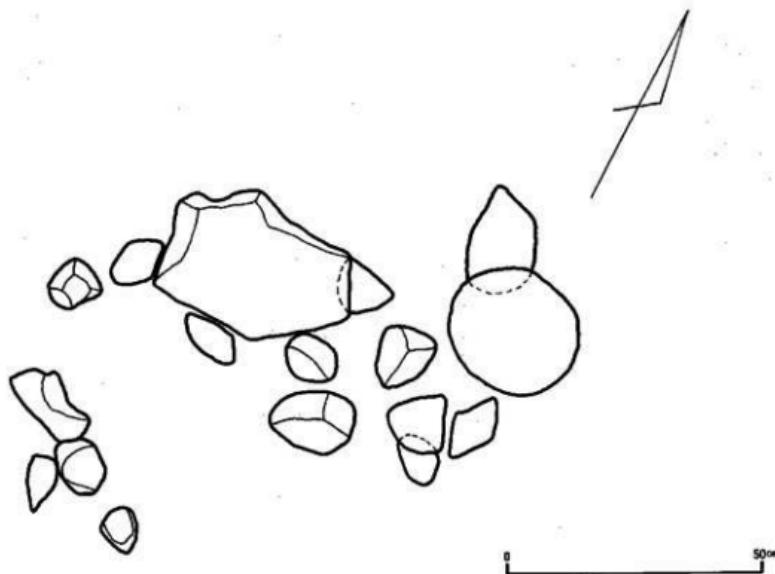
集石1の北側に位置するまとまりを集石2とした。J-10グリッドを中心に約40個ほどの石が見られる。石は密集するという状況ではなく、バラツキが多い。石の大きさは頗る大のものが比較的多く、東北の角には65×50cmほどの大きな平石が見られる。この石は上面がほぼ平らで、一部には擦った状況を観察できる。このような状況を見る時、この石だけは作業台として使用されたものと考えられる。端部においては打痕が見られ、石が欠けている。形、大きさ、安定感などから見ても作業台としては好都合の石であったと思われる。この周囲からも前期の土器片が多く見られ、遺構の東端部においては前期において生活があったものと推測される。



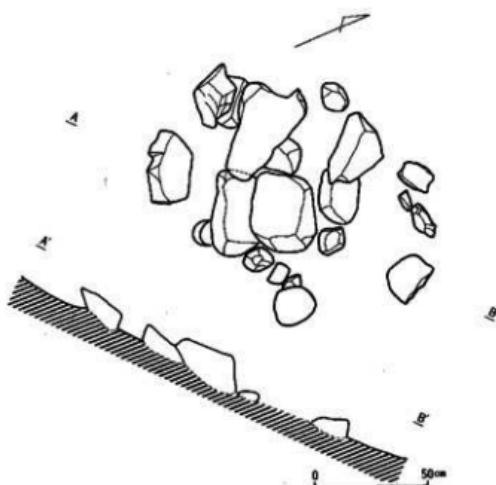
第7図 集石3実測図

### 集石3

第7図は集石3の状況を示すものである。径1mの円形内に約30個の石が集まっている。石はほとんどが同一面上にあり、明らかに目的を持った配石と考えられる。集石3に限らず、どの集石の下部も半カットとして調査したが、石の下には集石の性格を推定するような造構は見られなかった。集石の東端に長さ40cm余の角柱状の石が横になっているが、これを立てれば立派な柱状立石になる。



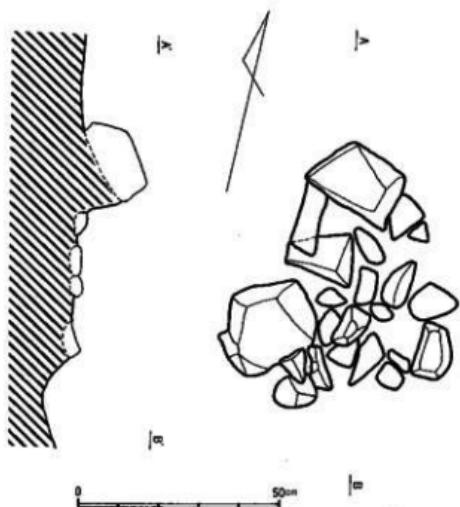
第8図 集石4実測図



第9図 集石5実測図

### 集石4、5

集石3と並んで位置している。集石2、5などと分けるのが適当かと考えたが、一つのまとまりと判断して細分した。中央にやや大きめな平石があり、周辺に15個くらいの小石が見られる。角礫が多く、割れた状態のままで検出されたものもある。5は比較的大きめの石が集中し、いかにも集石という感じをさせる。安山岩や、花崗岩が多い。



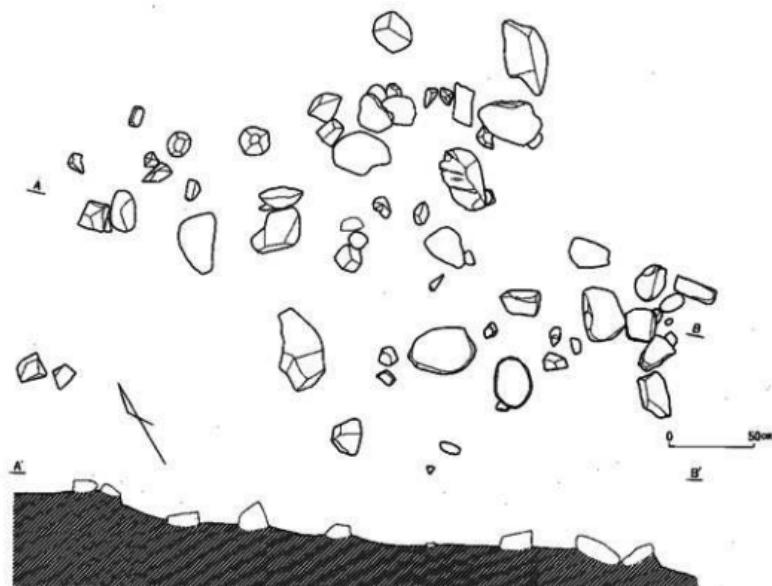
第10図 集石 6 実測図

### 集石 6

60×70cmほどの椭円形内に大小30個の石がぎっしり集まつた形で検出されている。人為的な感じを強く受ける集石である。石の下に何かの遺構の存在を推測して半カットなど実施して調査したが、下部遺構などを検出するには至らなかった。

### 集石 7

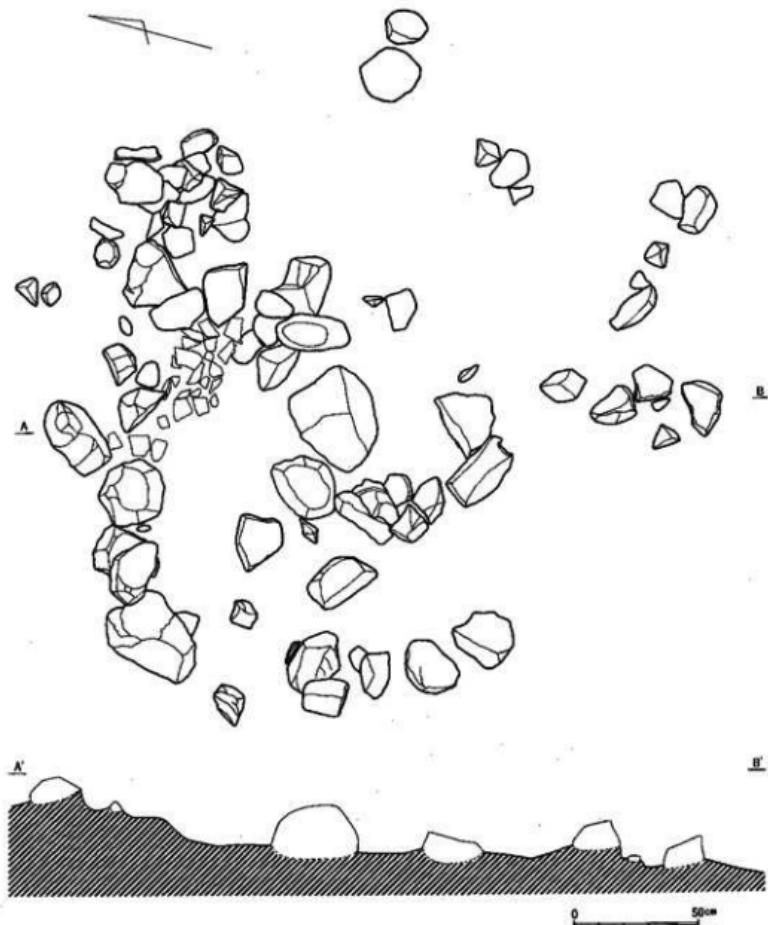
比較的大きな石が集中した部分であり、その範囲も大きい。集石の密度はそれほどでもないが一定の間隔をおいて配石している。平石がかなり見られる。



第11図 集石 7 実測図

### 集石 8

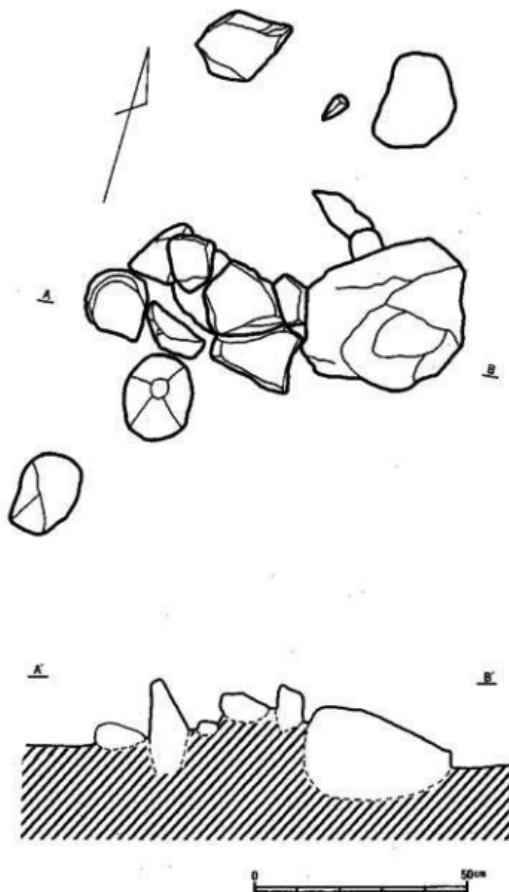
本集石遺構中、最も特徴的な部分がこの集石である。頭大の石を30個ほど配し、その中に一定の大きさに割った土器片（曾利II式）を中心してバラ撒いた状況で検出したのである。土器片の集中した場所は1m四方くらいの場所であるが、かなりの量である。この配石状況を見ると、この場所で何らかの祭祀的行事が実施されたことを感じさせる。集石の時期はこの部分を見る限りでは曾利II式期である。



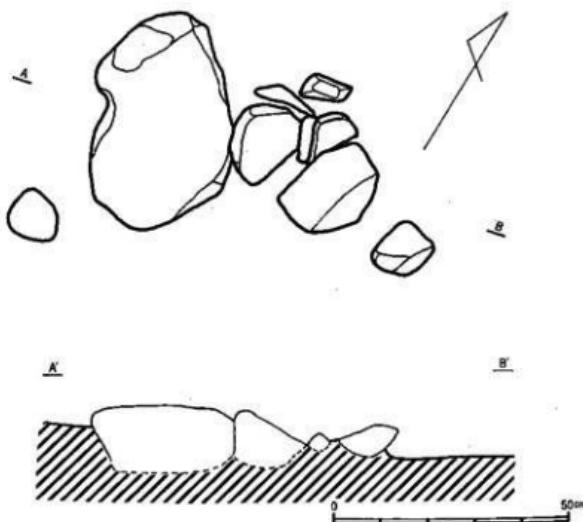
第12図 集石 8 実測図

### 集石 9

集石 8 と接するようにして一つのまとまりが見られる。約15個よりなる集石のほぼ中央に立石がある。全長25cmほどの石であるが明らかに立てている。一つの大きな意味を持った配石である。この立石をとり囲むように7個の石が配置してある。規模は小さいがまとまった形を呈している。祭祀的な遺構として見なければならない。



第13図 集石 9 実測図



第14図 集石10実測図

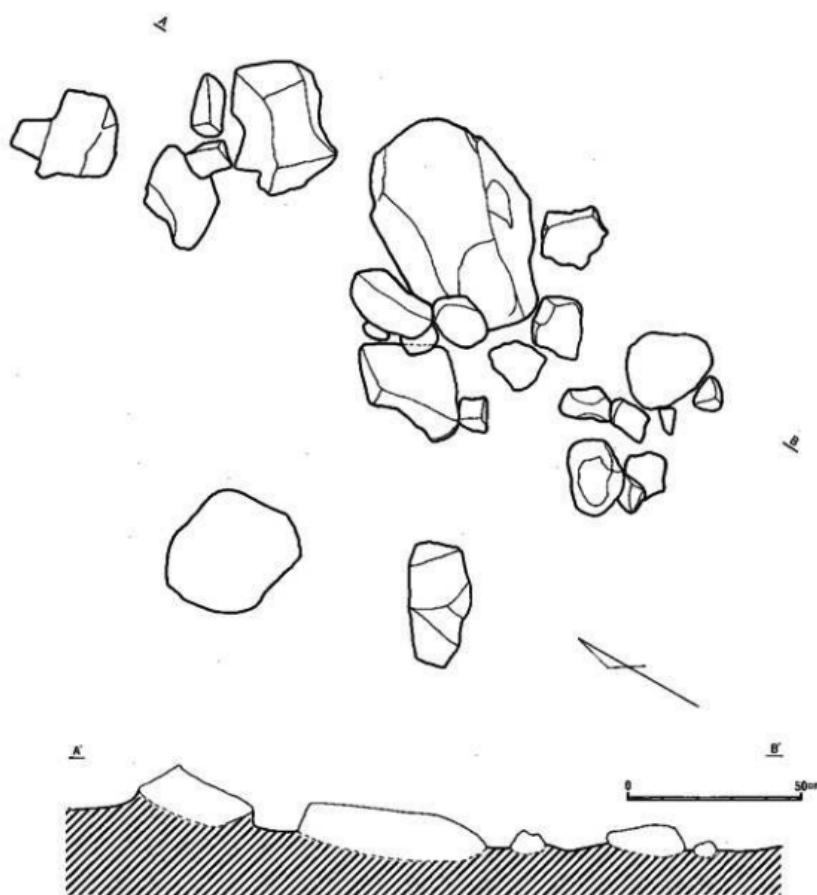
### 集石 10

調査区の最も西寄りのI-4グリッド内に検出されたものである。一部H列にかかったため、半グリッド南へ拡張した。集石は平石2個を中心で、大きな方は45×30cmの楕円形を呈している。上面はほぼ全面が平らになっており、作業台か・石皿的な使われ方をしたようにも推測できる。すぐ横に並んでいる他の平石は、二ヶ所から割れており、石全体の4割程度の残存状況にあるが、これも上面はきれいな平面になっており、作業台的な使われ方をしたものと考えられる。

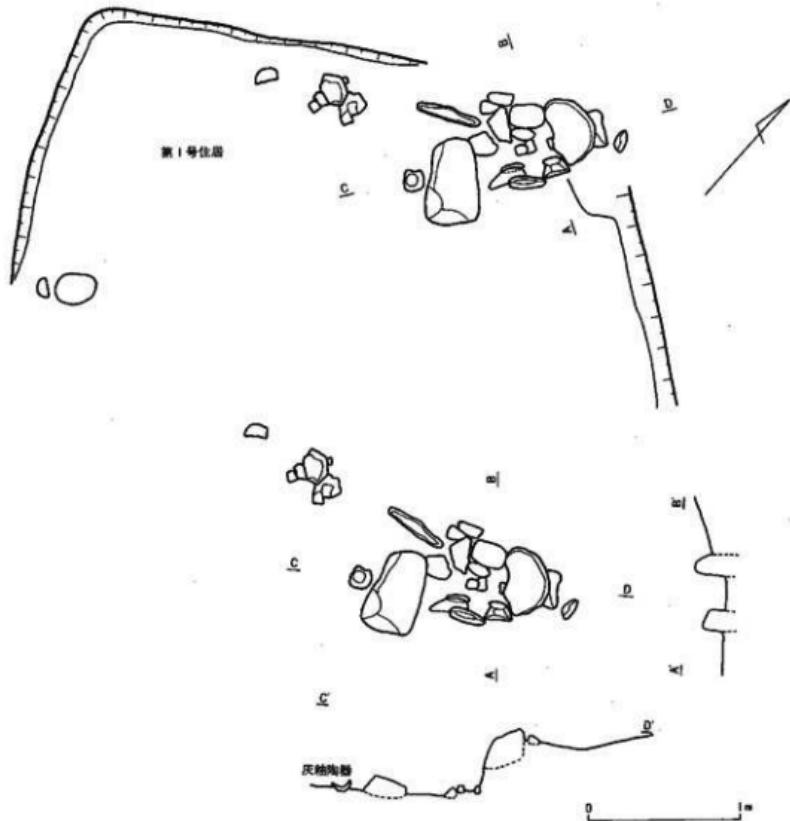
### 集石 11

集石10に並んで位置しているが、やや広めの配石状況にある。ほぼ中央に60×45cmの大きな平石が位置し、周囲に頭大の角礫が10個ほど見られる。中には打ち割った状況を残すものもある。最も西側に少し離れて、石皿が検出された。中央の凹みはさほど感じられないが、石皿として使用したものと推測できる。

これらの集石は祭祀的な意味を持った遺構と考えたいが、決定的な状況を示すような遺物・遺構状況とは判断できない。



第15図 集石II実測図



第16図 第1号住居址及びカマド断面図

## 1住居址

### 第1号住居址

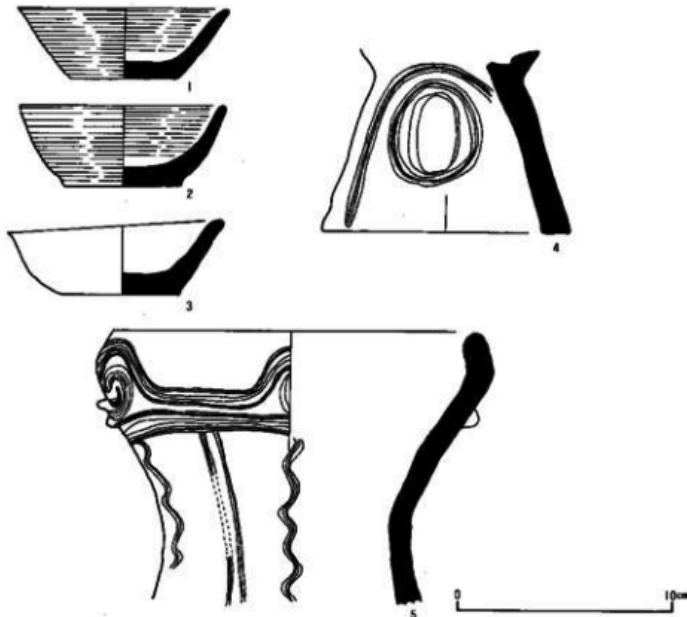
L-9グリッドを中心とする集石は住居址のカマドであった。背後の山から崩落した土砂は床面上に約1.2mほど堆積している。花崗岩の風化した黒色土中に掘り込まれた住居址であるため、プランや柱穴等は全く判断ができない状況であった。カマドは住居址の北西角に位置し、奥壁に大きな扁平状の石を立て、両袖には石を床面に立てて芯石としている。火床部全面に大きな長方形の石が見られるが、これは、天井石が落ちたものかもしれない。住居址床面と思われる位置から高台付の碗が二つ発見された。これにより本住居址は平安時代後期（11世紀）の住居址と推定した。

## 第2節 遺 物

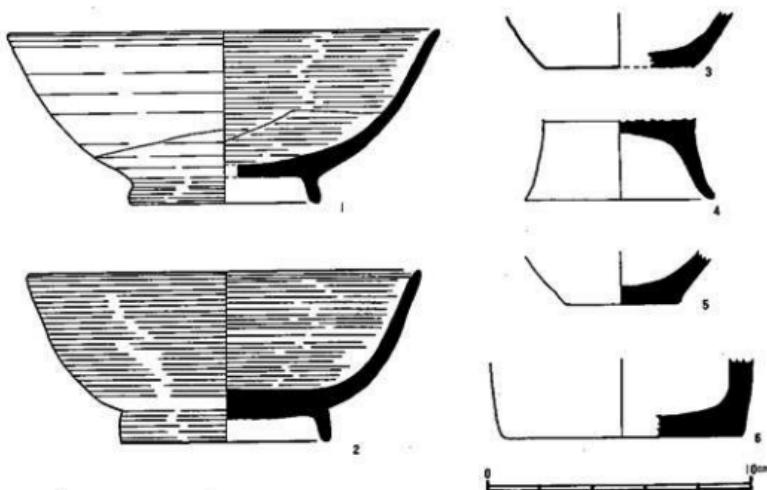
第17図に示したものはグリッドの調査中に確認したものであるが、1~3の杯は第1号住居址に関する遺物と推定される。3点共に土師器の杯で回転糸切り底になっている。ほぼ同様な形であり、胎土、色調、整形状況共によく似通っており、同じ場所で作られたものと推定される。整形が極めて難であり、形の歪みはひどいものである。胎土中にも小石を含み、所々で小石が顔を出している。11世紀の中ごろの時期であろう。

4は土器底部である。上部が全く見られないが、カップ型土器のすばらしいものが上にあつたのではないかと推測した。4ヶ所に精円形の窓をつけて飾っている。曾利I式ころに位置付けられる。

5はI~4グリッド内から出土したもので、キャリバー型を呈した壺である。腹部から逆八の字状に開きながら口縁に近づき、口縁部は内側に入り込む形に示している。繩文地に隆帯を付け力強い表現をしている。肩部から腰部にかけては沈線を重下させ簡略な文様構成になっている。繩文時代中期の曾利II式の特徴を示している。



第17図 出土土器実測図



第18図 出土土器・陶器実測図

第18図に示したものは第1号住居址内から出土した遺物である。実測可能な6点を図示した。1、2は灰釉陶器の碗であり他は土師器である。1及び2は灰釉碗である。第1号住居址カマド前から出土したものである。共に回転糸切り底付の高台という製作である。1は口縁部に向かってゆったりと広がりながら立ち上がっているのに対し、2はやや急な立ち上がりを示している。また高台も1はやや外に開き気味のに対し2はほぼ直に下がりながら底部は内側に入る形が見られる。また内側の底には重ね焼きをした時の高台の跡が円形に残っている。共に猿投産の11世紀中ごろのものと思われる。

3も同じく1号住居址内出土の土師器坏底部の一部である。内面にロクロ痕を残しているが底部は欠損しているため高台部分などについては不明である。時期は灰釉陶器と同じと考えられる。4は土師器の高台部分である。坏部と高台部の接続する部分から離れたことがよくわかる。この形式のものは昨年(1985)調査した末広遺跡にも見られた。八の字状に底部が開き、ロクロ整形痕を残している。5は坏の底部で回転糸きり状である。灰白色を呈しており胎土中には多量の金雲母と石英を含む。焼成は不良で器面がぼろぼろしている。6は土師器底部である。木の葉底になっており、赤褐色を呈する器面は刷毛による調整痕が見られる。焼成は良好である。いずれも11世紀中ごろの時期と考えられる。



第19図 出出土器拓影(1)



第20図 出土土器拓影(2)

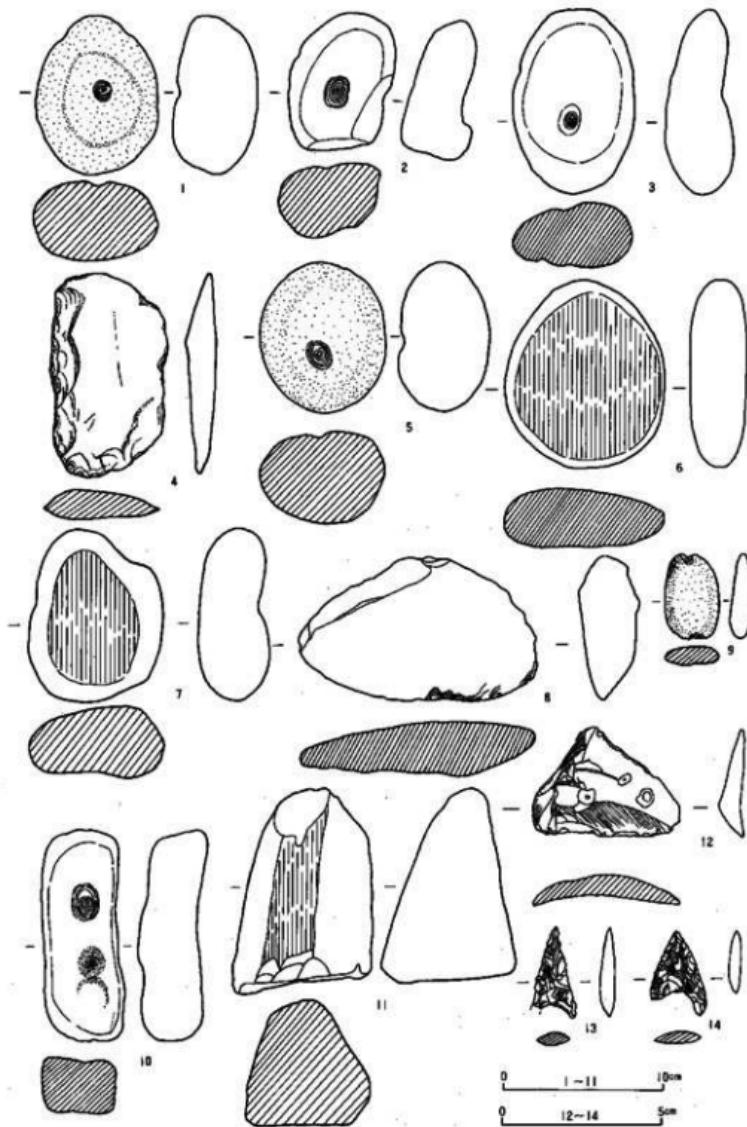
### 1) 土 器 (第19図)

本遺跡内より出土した土器類はほとんどが破片である。しかし出土した土器を観察すると、その期間は非常に長く、多くの時期にこの地が利用されたことを物語っている。縄文時代早期から中期中葉までの間はほぼ切れることなく遺物が見られる。特に縄文時代前期中葉から中期初頭までにかけ、良い資料の出土を見た。出土した土器について分類できるものについて若干の説明を加えてみる。

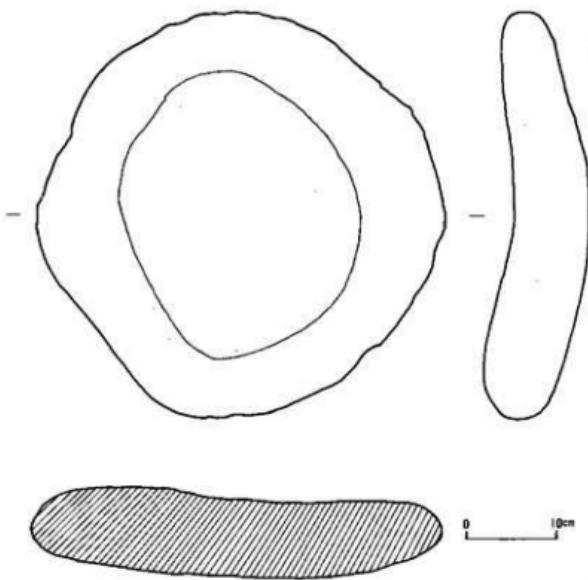
1は早期押型文土器の小片である。梢円押型文を示し、赤褐色の胎土中にはすごく細かな雲母と石英粒を含んでいる。2は貝殻の口唇を押し付けて施文した文様を主にしたもので田戸系の特徴を見る事ができる。黒味の強い褐色を呈し、やや大きめの石英粒を多量に含み、焼成は中位である。

3,4は爪型文を主体とした土器で、3は口縁部で、朝顔型の把手部分である。灰色の胎土中には植物繊維を多量に含み、焼成は良好である。4も同じく爪型文を主体とするもので、植物繊維を含んでいる。いずれも東海系の粕畠式土器の特徴を示している。5, 6は土器口縁部であり、平縁で内側にふくらみを持っている。口縁と平行して2条の凸帯をめぐらし、凸帯の上には刻み目を入れている。この土器は愛知県知多郡緑川町入海貝塚から出土した土器を標式とし

ており、縄文時代早期後半に位置付けられている。7は円形竹管の連続刺突と竹管による平行沈線を文様としている。黄褐色を呈する土器片は器厚が6mm程度で焼成は中位である。縄文前期中葉の諸磯a式の特徴を示している。8は深鉢形土器の肩部分の小片である。黒味の強い褐色をしており、胎土中にはやや大きめの石英粒を多量に含んでいる。前期半ばの黒浜式土器に類似する。9は縄文のみの土器であるため一括した。いずれも厚手大形の土器の一部であり、文様構成は、地文に半割竹管による集合条線が多様され、その地文の上に粘土の円文をはり付けている。黄褐色を呈し、焼成は中位である。前期後半の諸磯C式土器と呼ばれており、長野県ではこの土器に比定する時期として下島式土器をあてている。18~23は前期最終末期に位置付けられる晴ヶ峰式土器の特徴を持っている。小さな半割竹管を連続的に押し引きした文様が主体である。また三角形の産み陰刻文を配置しているものも見られる。次に24~35に示す土器片は、前述した晴ヶ峰式土器と併行する時期といわれる十三菩提式土器の特徴を持ったものである。器形は深鉢形を呈するものが主であると考えられ、口縁部の状況は内へわん曲したもののが見られ、キャリバー状を呈している。文様構成は細かい粘土ひもをはり付け、その上を半割竹管で連続押し引きして整形している。またソーメン状の細かい粘土ひもを口縁部にはり付けたものも見られる。36~39は施文工具に小さな半割竹管を用いたものである。前期末に位置付けされるものと考える。40, 41はやはり半割竹管による連続押し引きの爪形文、併行沈線文などが主体で、その他に刺突列点文なども見られる。42は口縁に近い一部でありJ-11グリッド内からの出土である。焼成はやや不良であるが、胎土中には細かな雲母を多量に含んでいる。中期初頭土器の梨久保式土器の特徴を示している。43は口縁部に折り返しを施した土器片で、器面に縄文を見ることができる。茶褐色を呈し、焼成の良好な土器である。44は結節縄文を施している。中期初頭土器（下小野式）の一群である。次に45~59の土器片であるが、いずれも大形の深鉢形土器の一部で、加曾利E式といわれる部類に入るものである。太い隆線を基本にして渦巻文様や列点文様などを多く用いている。60~62は沈線を多様して文様構成をしている。煮こぼれが焦げ付いて炭化した状況を見る能够である。東海系の感じのする土器である。63~64は後期の堀ノ内式土器に位置付けられると考える。薄手で、土器内面をよく整えている。65は後期中葉に位置付けられている加曾利BII式の特徴が見られる土器片である。地文を縄文にして、その上に粒土紐をはりつけ、その上を等間隔に押しつぶしている。黒褐色を呈し、胎土中には、やや大きめの石英を多量に含んでいる。



第21図 石器実測図



第22図 石皿実測図

## 2) 石 器 (第21図)

遺跡中より出土した石器は14点を数えた。多くは磨石及び凹石類が多く、黒曜石を原料とした石器は3点のみであった。

1, 2, 3, 5, 10の5点は凹石である。いずれも磨石と併用しており、片面又は両面に摩耗痕を残している。5個の凹石のうち表裏共に凹孔を有するものは3のみで、他は片面だけである。凹孔の様子もその使用目的によって形状が異なっている。3の表面の凹んだ状況は、回転摩耗によると見られるロート状であり、凹面がなめらかである。表面の摩耗状況も顕著であり、石器使用度の高いことを物語っている。また片面のみ強く火熱を受け、赤変している。他は打撃による結果の凹みと考えられるが、1, 5は打痕点が比較的一点に集中した状況にある。2, 10は打痕点が広くなり、比較的浅い。石質は安山岩及び、砂岩である。

次に6, 7, 11は磨石である。いずれも手ごろな自然をそのまま用いて道具としている。6は扁平で卵型の石を用い表裏両面を使用している。片面の使用度は他に比べて極めて高く縦線が形成されるほどになっており、そして全面が非常になめらかになっている。縁の部分は敲きに使用された痕跡が見られる。砂岩である。

7は片面だけを磨石としている。11は断面三角形の磨石で角の二ヶ所を使用している。一ヶ所は使用度が非常に高く、角の形状が大きく変わってしまうほどである。他の角は磨滅というより打撃による形状の変化である。一つの石器における使用目的の使い分けをしていることがわかる。4は母石の側縁を利用して作った剥片石器である。形状は短冊型を呈し、一見打製石斧のように思えるが、刃部は両縁辺にあり、横刃型の石器と考えられる。細かな調整を施し形状を整えている。石質は砂岩である。8は刃部を底辺に設けた横刃型石器である。刃部は4に比べ鈍角であるが、刃部の調整は細部にまで及んでいる。

9は石錐である。長径5.5cmの楕円形を呈する自然石を用い、両端部を抉っている。沢川における魚取りに用いたものであろうか、石質は石英斑岩である。12は黒曜石を原石としたスクレイバーである。三角形を呈しており、そのいずれの縁にも調整を施し刃部としている。J-7グリッドからの出土である。13、14は黒曜石製の石鎌である。片脚の一部を欠損しているが、先端及び両縁辺は鋭い調整剝離が加えられている。脚部の抉りが比較的深い石鎌である。

## 第IV章 発掘調査のまとめ

箕輪ダム建設に伴う発掘調査も三年目に入った。昭和59年度において3ヶ所の確認調査を実施し、そのいずれも遺構及び遺物の検出を見た。そのため昭和60年度において2ヶ所（末広A、落合A）の遺跡について本発掘調査を実施した。残りの1ヶ所が本遺跡である。

昭和61年5月16日より6月3日の間において緊急発掘調査を実施した。調査地は土捨場になっているため、周囲から埋め立てが始まっており、工事と競争するような緊迫した状況下にあり、連日の騒音と土埃の中で実施された。

調査の概要及び発掘調査の実施中、また、整理作業を通して気付いた二、三の点を記しまとめとしたい。

1. 本遺跡は、沢川上流の日向地籍に入った黒尾地籍に在り、沢川右岸の小支流によって開析された、小さな谷間に位置している。遺跡はわずかな平地を利用しており、畑となっていた傾斜地の全部を発掘調査した。遺跡地として考えられるような地籍もあるが、そのような平地は、現在まで生活していた人々の住宅及び開田における工事のため全く現形を留める状況ではない。現地形を留めていると推定した本地区を調査対象地とした。
2. 発見された遺構の主なものは平安時代後期の住居址と縄文中期（曾利II式）と考えられる集石群である。
3. 検出された遺物は縄文時代早期から中期中葉にかけての土器片及び、平安時代後期（11世紀）の土師器及び、灰釉陶器片と縄文時代の石器14点である。

次に調査の経過及び整理作業中に感じたことについて少し触れてみたい。

長岡新田日向地籍における遺跡の時代的流れについては、過去二年間の発掘調査及び、それ以前の既出遺物において概要を推測することができる。小形爪形搔器等の確認により縄文時代もかなり早い時期において、新田の谷に人々が入っていることを知ることができる。縫を隔ててはいるが、諏訪との文化について考慮しなければならない。土器の最も古いものとして早期押型文土器を確認したが、小片のわずかなものである。これは以前から知られていた遺物であり、石器の存在から考えられることである。以後縄文中期中葉の時期まではほぼ途切れることなく土器が検出された。少し間隔を置いて後期中葉に至り少量ではあるが、土器が見られる。そして次の時期に人々が入って来るまでに2000年余を経過している。平安時代の後期（11世紀）になってからである。本遺跡において、一ヶ所の住居址を確認したが、これは前年発掘調査を実施した末広遺跡や落合遺跡を見るものと同時期と考えられる。住居址はカマドを山際の北西の角に配し、しっかりとした石組によって形成されている。カマドの位置は前年実施したもの

とほぼ同じような状況を示している。本文中にても触れたが、住居址は花崗岩の風化したザラザラな黒色土中に掘り込んで構築してあるため、住居址のプランや床面の検出には非常に困難をきたした。結果においてカマドはほぼ検出できたが、住居址のプランは確定できなかった。平安時代の住居址については以上の概要であるが、本遺跡中のほぼ全面に検出された配石遺構について少し触れてみたい。

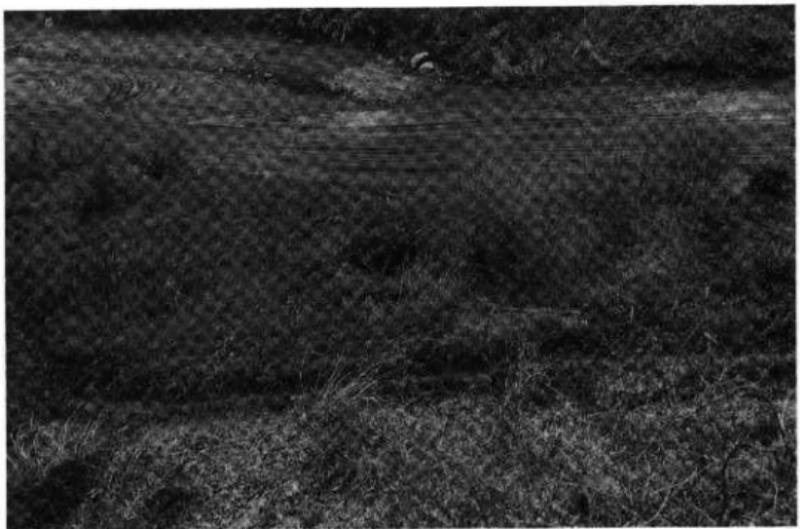
配石はそれぞれ集中した部分によって一つ一つの単位として11個所に区分けしてみた。この分け方が適当かは後になって（まとめの作業中）疑問を生じたが、一応このように分類してみた。明らかに一単位と認められる状況の場合とそのように理解しにくい場合がある。次に配石が実施された時期としては遺構中から検出されている土器片によって、縄文時代中期後葉の曾利II式と考えられる。このことは集石8の状況ではっきりしている。また集石はほぼ同一面にあり、現状の地形と平行していることなどから一時期（曾利II式）の配石と考えた。次に配石の目的であるが、各単位ごとに配石の状況が少しずつ相違が見られる。また配石の中において2~3個見られる大きな石（扁平石）は表面に摩耗痕が見られる。この石などは作業台的な要素を含んでいる。また配石8の状況は他と大きく異なり、配石の間に土器を一定の大きさに割つてばら薄いた状況が見られる。この状況などを見るとやはり祭りとか祈りという状況を推測することができ、この場所が縄文人の祭祀の場所であったと考えられる。

次に平安時代の人々がこの地に住居を設けて生活しているが、このような山中に入り込んだ人々は、生活の基盤を何に求めたのであろうか。このことは先年の調査結果においても同様な結果を生じた。平安時代の此の時期になると、山間地に入り込んだ遺跡をよく見ることがあるが、当時の政治状況や社会内容において、このように山中に入りて生活の場を求めることが、好んで行われたのであろうか。山中の生活が楽であったのか。いろいろ考えさせらるところである。（隠田集落）

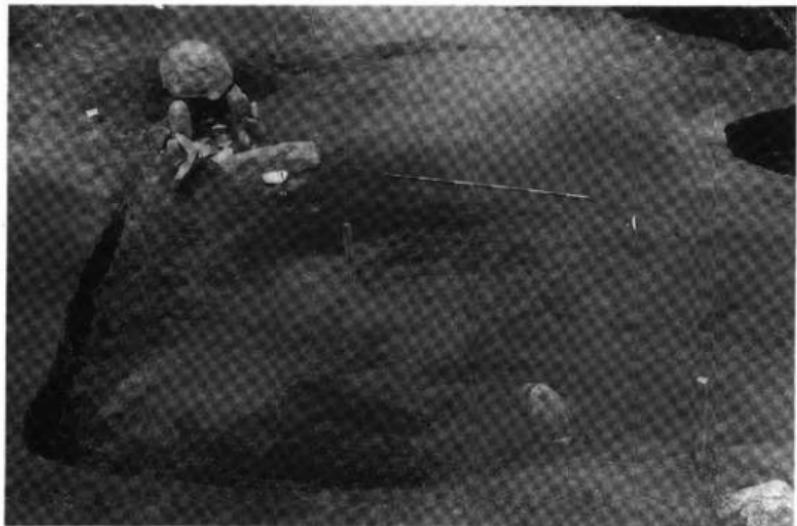
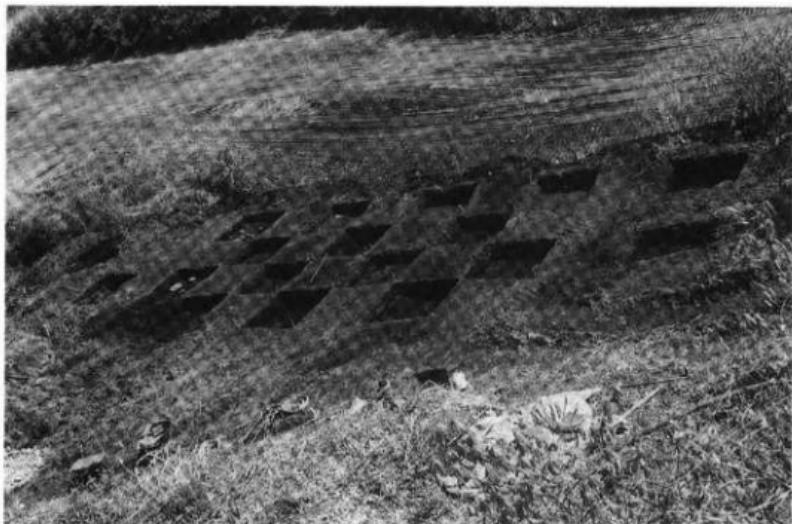
調査が終了し、まとめの作業を通して今後考えなければならない問題点などいくつか見られるが、今後共に発掘調査が続いて計画されているので、それらを含めて検討したい。  
報告書執筆にあたり、ご協力を頂いた伊那市教育委員会の飯塚政美氏、調査にご協力下さった調査員及び作業員の皆様方に心から謝意を表する次第です。

（柴 登巳夫）

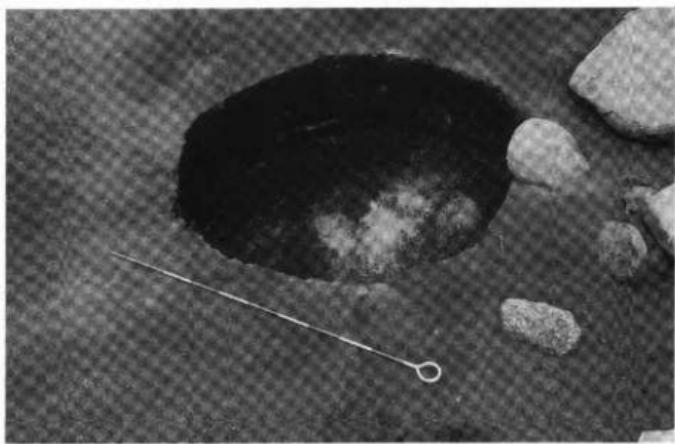
# 図 版



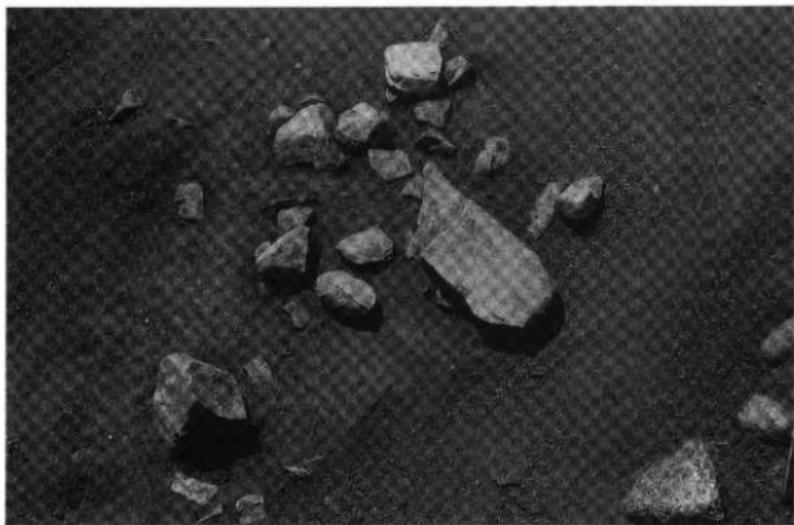
図版 I 遺跡全景



図版II グリッド状況(上) 住居址(下)



図版III カマド状況(上) 土抜(下)



集石 1

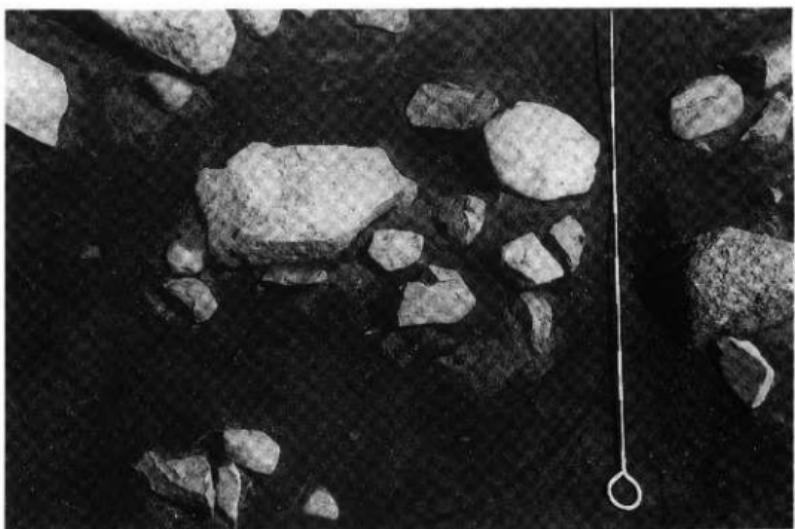


集石 2

図版IV 集石 1・2

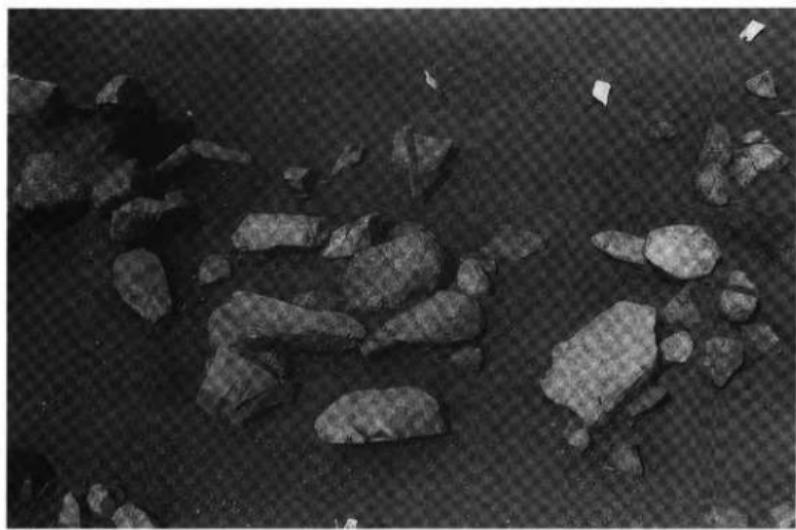


集石 3



集石 4

図版 V 集石 3・4



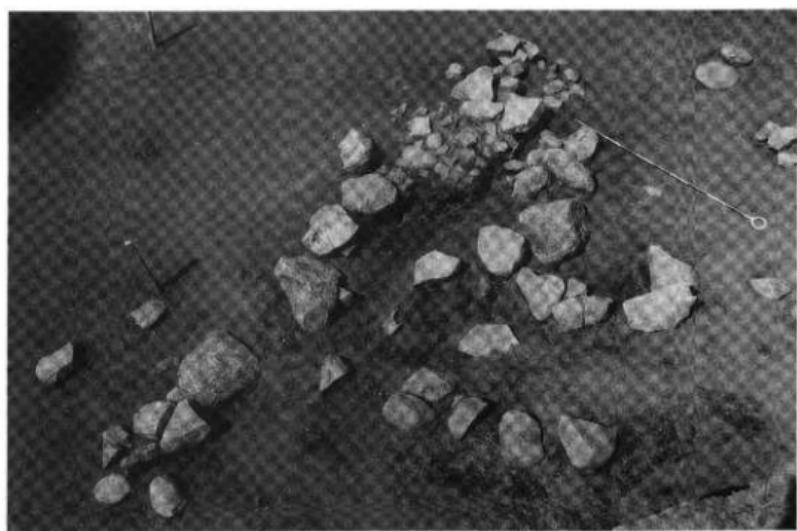
集石 5



集石 6

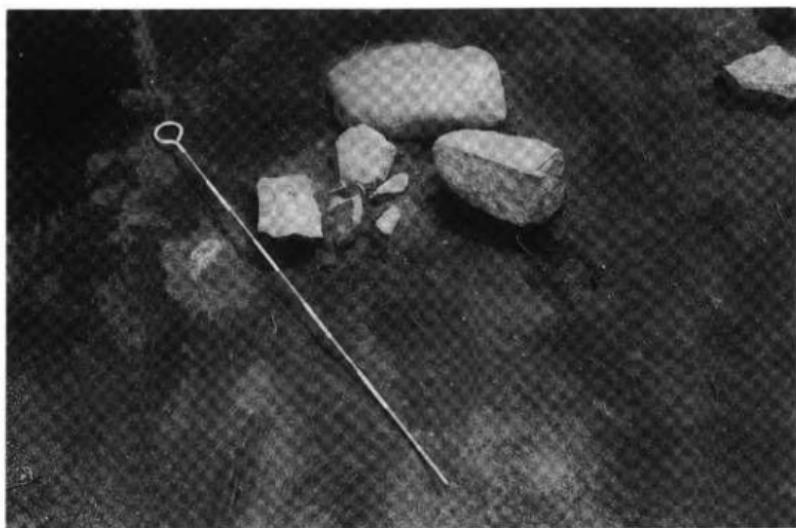


集石 7

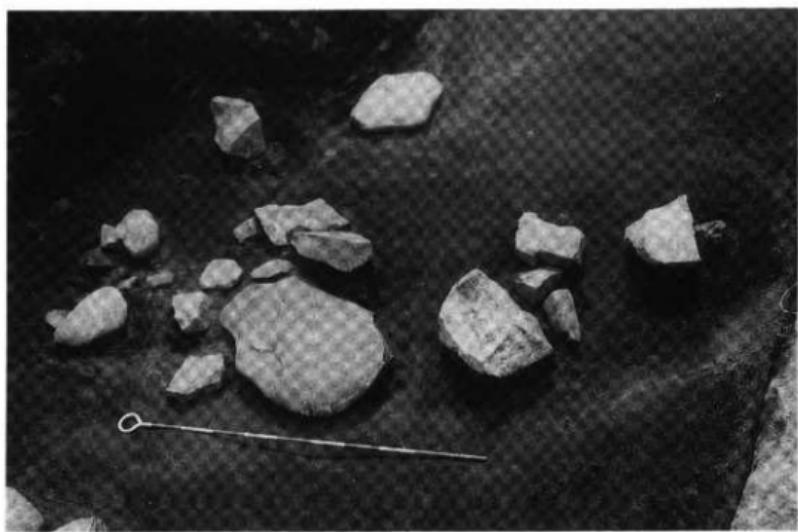


集石 8・9

図版Ⅷ 集石 7・8・9



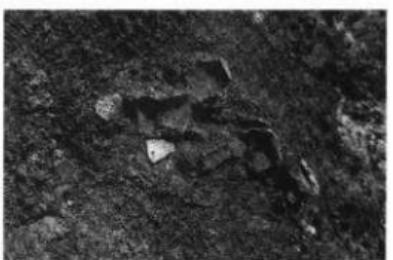
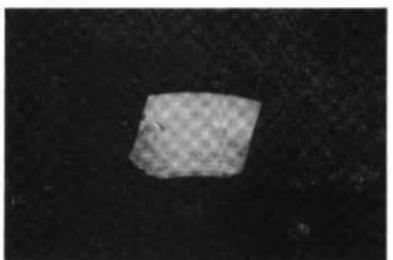
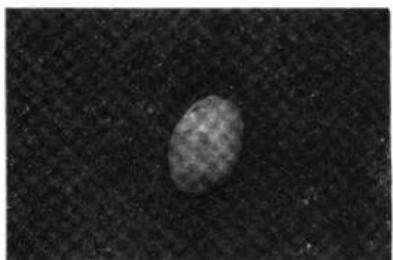
集石10



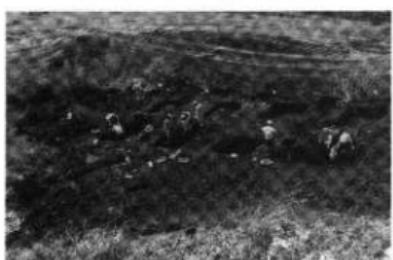
集石11



第九図版 出土土器石器



第 X 図版 遺物出土状況



第11図版 調査状況Ⅰ



第13図版 調査状況II



第3回団版 調査参加者

長岡新田関係遺跡  
(黒尾)

長野県上伊那郡箕輪町  
緊急発掘調査報告書

昭和62年3月31日 印刷  
昭和62年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市 犬小松総合印刷所